

神大病院の研究 1000万円助成

インスリンを生涯投与し続けなくてはならない「1型糖尿病」患者に対する遠隔診療システムを研究している神戸大病院（神戸市中央区）に、患者・家族の支援団体である認定NPO法人日本IDDMネットワーク（佐賀県）が、1千万円の研究助成金を贈った。ふるさと納税制度を活用したクラウドファンディング（CF）で、全国297人から寄せられたお金という。

患者支援団体がCF活用し

神戸大病院の廣田勇士（ゆうし）准教授によると、1型糖尿病は、すい臓のインスリンを出す細胞が後天的に壊れ、インスリンを投与しなければ死に至る病気。糖尿病患者のわずか数%しかおらず、原因は解明されていない。全国に十数万人患者がおり、血液中の糖を筋肉などに取り込むことができずやせ細っていく一方で、高血糖の症状も出る。

1日数回のインスリン投与が必要だが、食事内容に応じて薬の量を変えなければならない。必要量より多いと低血糖となり、場合によっては昏睡（こんすい）状態に陥るため、食事に含まれる炭水化物量に合わせ、医師や管理栄養士らが定期的に指導しているという。

「1型糖尿病」の遠隔診療実現へ

新型コロナウイルス禍で受診控えが広がる中、同病院は、腕などに着けて血糖を測る測定器に着目。測定データを活用して適切なインスリン量を指導する遠隔診療システムの開発に着手した。全国14の医療機関が開発に賛同しており、完成すると、どの地域でも同じ基準にのっとった指導が可能になる。また、受診日の合間でも、きめ細かく調整できることが期待されるという。

廣田准教授は「データを集め、治療現場で検証しながら精度を上げるために助成金を活用したい」と話している。（霍見真一郎）



常時腕に着けて血糖値を測る測定器の説明をする廣田勇士准教授＝神戸市中央区楠町7、神戸大病院